アキレスと亀

藤井颯太郎

どうしたって僕は兄には敵わない。誰かが百円ショップで買ってきた〝本日の主役〟と書かれたタスキを身につけ、いつもよりワンランク情けなくなった僕は、ひとりビールを飲みながらそう思った。わざわざ今日のために集まった親類縁者は皆、兄の失敗談や子供の頃の話で盛り上がっている。今日は僕の誕生日だというのに。

二つ年上の兄は要領の良い人間じゃなかった。遅刻の常習犯でよく人を待たせていた。約束を守らず、借りたものは返せない。辛い物が苦手で必ずキムチを残す。弟の僕はそんな兄をみて、借りたものはきちんと返し、約束の時間を守り、勉強やスポーツでも常に兄より高い成績を残せるよう努力した。兄が残したキムチは毎回僕が食べた。それなのに兄は、僕なんかの何倍も、みんなに愛されていた。どこへ行っても僕は「大池君の弟」だった。

僕の二十一歳の誕生日、兄はドラマチックに死んだ。泳げないのに真冬の川へ飛び込んで、子供を助けたのだ。ドラマチックすぎる。泳ぎが得意だった僕がその場にいれば、子供も助け、自分も生きて帰れたと思う。でも現実では、僕はその時バイト先で小銭を数えていて、水泳の補習授業に毎年呼び出されていた兄が、子供を助けに冬の水へ飛び込んだのだ——。もう二度と勝てないと思った。ここからの人生でどんなに大きなことをしようが、僕が兄を追い抜く日などやってこないのだ。

「ちょっとタバコ買ってきます」僕の宣言は誰の耳にも届かないまま、グラスが食器に擦れる音や、兄の話をする父親たちの楽しげな声の中へ潜り込んで消えていった。家を出て十五分ほど歩き、最寄りのコンビニへ辿り着く。レジでタバコの番号を伝え、ホットコーヒーを入れるための紙コップを受け取る。

「あれ。大池君の弟くんじゃない？」

レジの女性が声をかけてきた。名札には「藤宮」と書かれている。これまで一度も会ったことのない人だった。「そういや大池君から預かってるものがあるのよ。弟くんに」そういうと藤宮さんはタバコをカウンターに置いてレジを打ち始めた。混乱した。兄が僕に直接渡さず、この人になにかを預けた？ いつ？ 疑問が全部顔に出ていたのか、藤宮さんは「あとちょっとで上がるから、待てる？」とイートインを指差した。

彼女を待って一時間が経った。ホットコーヒーは酔いとともにさめ、椅子の硬さに尻が飽き始め、居心地の悪さが限界を迎えようとした頃、私服に着替えた藤宮さんが現れた。「本日の主役なの？」僕が脱ぎ忘れていたタスキを見て藤宮さんは言った。「誕生日なんですよ今日。ちょうど、兄貴と同い年になりました」彼女の後をついて店を出る。藤宮さんは特に祝いもせず、かといってお悔やみの言葉を述べることもせず、無言で歩き続けた。沈黙が怖くなって短く質問を繰り返す。「兄の友達だったんですか」「あとで説明するよ」「いい」「預かってるものって？」「あとで説明するよ」「いつから預かってるんですか」「小学校五年、あ、六年生くらいかなぁ」「小学校？」「私、大池君と同じクラスでさ」思わず足が止まりかけた。思っていた以上に昔の話じゃないか。「なんですぐ渡してくれなかったんですか」「次、弟に会ったら渡して欲しいって言われて、次会ったのが今日だったんだよね」コンビニから十分ほど歩いた頃、小さなマンションにたどり着いた。

「狭いけど入って」藤宮さんはコートも脱がず寝室へ行き、クローゼットの奥の方からいくつか関係のないものを引きずりだしたあと、紙袋を一つ、僕に差し出した。受け取り開けると、小さなゴーグルが入っていた。ゴーグルには僕の名前が書かれている。確かに、これは小学生の頃、僕がつけていたゴーグルだった。

「弟くん、水泳でなんか優勝したことあるでしょ」彼女のいう通り、小学四年生の頃、地域の水泳大会に出て一度だけ、一位になったことがある。「大池君って泳げなかったでしょ。弟が優勝したのが悔しくて、それ、隠しちゃったんだってさ」藤宮さんは散らかったものを丁寧にクローゼットにしまいながら言った。「すぐ後悔したらしいんだけど。自分から返すに返せなくなって、次、弟に会った時、あたしから返しといてって渡されたんだよね。十三年前ね」そう言って藤宮さんは笑った。僕は、全く気付いていなかった。ゴーグルが消えていたことも、兄が僕に嫉妬していたことも。なにひとつ、僕は知らなかった。「渡さないことも考えたんだけどね。でも渡さないと大池君が、美しくなりすぎちゃうでしょ。本当はカッコ悪い人だったのに」彼女はやっとコートを脱ぎ、ハンガーにかけ始めた。「大池君も不本意だったろうね。あんなかっこよく死んじゃってさ」

藤宮さんはもう少しだけ、兄のカッコ悪い話を聞かせてくれることになった。気づくと、僕の上着はハンガーラックにかけられていて、僕の両脚はコタツの中に収納され、僕の両掌は温かいコーヒーの入ったマグカップに温められていた。こんなによくしてもらっていいんでしょうか、とコタツの中から聞くと「いいんじゃない。〝本日の主役〟なんだから」と更に晩御飯までご馳走になることになった。今日初めてタスキに感謝した。

「弟くん。そういや私、弟くんの名前知らないわ」キッチンで鍋の具材を切りながら藤宮さんが声をかけてきた。大池マサユキです、とコタツ越しに返事する。「マサユキくんね。マサユキくんは辛いもの苦手？」と聞かれたので「めっちゃ好きです」と答えた。「大池君と似てないねぇ」そう言うと、藤宮さんは兄が苦手だったキムチを、容赦なくドカドカと鍋に放り込んだ。

「声の展示」朗読 ——— 今井 春菜　小野 桃子
撮影（@豊中市内）——— 鈴木 竜一朗